



世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。

TICAD IVをきっかけに、アフリカを知ろう

第4回アフリカ開発会議（TICAD IV）の開催地となった横浜市は、外務省、（社）青年海外協力協会、JICAと共同で「TICAD IV サイドイベント組織委員会」を立ち上げ、アフリカに対する理解促進を目的にさまざまなイベントを企画、実施してきた。



元街小学校を訪問し、ウガンダについて授業をするジェミマ参事官。実際にアフリカの人から聞く話は、子どもたちの心に響いたようだ

横浜市「一校一国」運動

その一つが、横浜市内の小学校を対象に行われた「一校一国」運動。日本にあるアフリカ35カ国の大使館の協力を得て、子どもたちにアフリカについて学習する場を提供する取り組みだ。これは、JICAが推進する開発教育支援の一環でもある。市内の小学校に参加を募ったところ、名乗りを上げたのは計55校。今年2月から4月にかけて、大使館、外務省、JICA、青年海外協力隊OB・OGによる出張授業が行われた。

アフリカの人に会って

JICAからは、アフリカ部の職員16人が参加。各国大使館の大使や参事官らと31校



いずみ野小学校を訪れたモーリタニア・イスラム共和国大使館のウルド・イナラ・ジャーラー一等参事官（中央）と民族衣装に挑戦する牧野校長先生（右）

第16回

アフリカと出会った子どもたち

5月28～30日に、第4回アフリカ開発会議（TICAD IV）が開催された横浜市では、市内の小學生にアフリカについて知ってもらうことを目的に、「一校一国」運動が実施された。アフリカ各国の大使館や外務省職員、JICA職員、青年海外協力隊OB・OGなどからアフリカの話聞いた子どもたちは、はるか遠いアフリカについて、何を学び、感じたのだろうか。

から次へと質問が飛び出し、どの学校も予定時間をオーバーするほどだった。港南台第二小学校と小坪小学校（カメルーン）、いずみ野小学校（モーリタニア）を訪問した中西部アフリカ第二課の岩本園子さんは、「アフリカの“人”がその場にいるというインパクトが強かった

いです」と言う。最初は緊張していた子どもたちも、カメルーンのエソンバ大使（当時）の太鼓のパフォーマンスには思わず拍手。最後には、握手やサインを求め、長蛇の列ができた。

ウガンダ大使館のジェミマ参事官と、元街小学校・北方小学校を訪問した東部アフリ

カ第一・二課の松岡秀明さんは、「これがかっこよくなって、異文化や国際協力に興味を持つてくれたらいいですね」と話す。

「日本人の印象は？」という質問に、「親切で親しみやすく、ウガンダ人と似ていますね」とジェミマ参事官。遠く離れたウガンダが、身近に感じられた瞬間だった。

一校一国運動から生まれた国際協力

一校一国運動をきっかけに、横浜市の小学校とアフリカの間、新たなつながりが生まれた。

5月30日、TICAD IVに出席するため来日したカメルーン政府団は、自国の舞踊団を引き連れて、港南台第二小学校と小坪小学校を訪問。現地の楽器による華麗な踊りを披露した。協力隊OGでもある小坪小学校の荒井真弓先生は、「本やテレビではなく、“人”を通して伝えられる知識が大切なんです」と強調する。ウガンダについて学んだ元街小学校では子どもたちが「アフリカのために、何かできることがないか」と、ペットボトルのキャップを回収する



5月17日に横浜赤レンガ倉庫で行われた「アフリカンフェスタ」で、元街小学校の6年生は一校一国運動の成果として、自分たちが学んだことを発表した

運動を始めた。キャップ800個で子ども1人分のポリオワクチン（20円）に換金できることを知り、地域全体に広めていこうと意気込んでいる。さらにJICAの橋渡しで、ウガンダの首都カンパラのナカセロ小学校とEメールのやりとりを始める予定だ。「ウガンダについて勉強してみても、現地の子どもたちに直接話を聞きたいという気持ちが出てきたようです」と6年生担任の上田亜希先生は言う。中田宏・横浜市長は、今後も一校一国運動を継続させる意向を示している。一校一国運動から生まれた横浜とアフリカのきずな。未来を担う子どもたちの交流を通して、国際協力の輪が広がっていくに違いない。

NPO法人エコキャップ推進協会(<http://ecocap007.com>)による運動。